

伊勢湾文化資料研究センター

センター長 山中 章

三重大学は伊勢湾の西岸中央部の海岸線に位置します。古代の国名では伊勢国安濃郡の一角です。

伊勢国はいうまでもなく古代王権の祖先神の一つ天照大神を祭る伊勢神宮を戴く国であり、多気郡には天皇の名代として神宮祭祀を執り行う斎宮が設けられていました。このような王権との深いつながりは、古代のみならず中世以降も、伊勢国に他の地方とは異なる様々な経済、社会、文化をもたらしました。ところがこれまでの人文諸科学はともすれば「伊勢」を等閑視し、その研究は偏りがちでした。そこで改めて伊勢湾をめぐる歴史学、考古学、地理学、文学、社会学などの諸分野の研究者が集まり、まず第一に研究基盤の確立のために、伊勢湾西岸地域を中心にその周辺部をも視野にいたれたデータベースの構築を共通目標に設定しました。各分野で既に集積された資料や、新たに集積されようとしている諸資料をセンターに集約し、「伊勢」地域の特性を解明する基盤を確立しようとするものです。ついで第二に、基礎資料をもとに学際的な研究を進めようと考えました。具体的に各分野の研究者が共通の素材をもとに研究することによって、より視野の広い研究成果を得ようとするものです。

センターにおける学際的研究の深化は、今日の地方大学に求められている個性ある研究、社会に還元できる研究を生み出すことになるでしょう。

I プロジェクト活動状況

本センターでは以下のようなプロジェクトを立ち上げ、学内にとどまらず、広く地方自治体、三重県内の研究者・市民と共同して目標の実現に向けて調査・研究活動をすすめている。各プロジェクトの本年度の研究成果は以下の通りである。

1 古代中世伊勢国の総合的研究

研究員：山中章（代表）、廣岡義隆、山田雄司

(1) プロジェクト全体の研究と成果

二度にわたるシンポジウムでは延べ700人の参加を得た。また、新たに「壬申の乱ウオーク」を開始した。年4回、壬申の乱や聖武天皇の関東行幸に関連する遺跡を見学する活動である。本年度は260人の参加を得、伊勢湾文化資料研究センターを広く市民に周知させる役割を果たした。

① 第3回久留倍遺跡シンポジウムの開催

2005年7月21日（日） 13:00~18:00 四日市市総合会館8階

講師 岸宏子（作家）直木孝次郎（大阪市立大学名誉教授）、武田佐知子（大阪外国語大学教授）、山中章（三重大学）

参加者 350人

② 第4回久留倍遺跡シンポジウムの開催

2006年2月11日（土） 13:00~17:00 あさけプラザホール

講師 馬彪（山口大学教授）、八賀晋（三重大学名誉教授）、山中章（三重大学）

参加者 350人

③ 壬申の乱ウオークの開催

伊勢国内には古代を中心とした著名な遺跡が点在する。こうした遺跡群を繋ぐルートとして東海道、伊勢道、大和街道、阿須波道などが古くから設けられている。本企画はこうした旧街道を歩きながら周辺に所在する遺跡や歴史遺産を訪ね、その歴史的意義を考えるきっかけをつかもうとするものである。事業実施にあたっては地元教育委員会の協力を得るほか、地域住民の自主活動グループ「久留倍遺跡を考える会」の積極的な援助を得て、地域連携のモデルケースとして実施している。なお、原則として2・5・8・11月の第二土曜日を実施日として定め、新聞などを通じて周知を図っている。

第一回 2005年11月12日（土） 鈴鹿関を訪ねて（亀山市教育委員会後援）

参加者 65人

第二回 2006年2月12日（日） 繩生廃寺から朝明頓宮跡へ（朝日町教育委員会後援）

参加者 200人

④ 久留倍遺跡第二次発掘調査の実施

科学研究費基盤研究(B) 「聖武天皇の伊勢行幸に関する総合的研究」(研究代表山中章)に

より久留倍遺跡北東部および東部の発掘調査を実施した。

調査期間 2006年2月24日から3月31日

調査面積 約200㎡

調査成果

- (a) 久留倍遺跡北東部および東部の地形改変過程の解明
- (b) 東部における奈良時代の土地利用実態の解明
- (c) 中世における土地利用の解明
- ⑤ 古代・中世伊勢関係資料のデータベース作成
- ⑥ その他

(2)個別研究と成果

共同研究成果を活かした個別研究を精力的に実施し、個別研究成果として以下の出版物を刊行した。

(a) 廣岡義隆の研究成果・刊行物

四日市市立博物館が主催し、同所で企画展示が行われた図録『聖武東遊』に2編の論文を掲載し、広く市民にもその成果を広めた。

- ・「描かれた戦さー『萬葉集』と壬申の乱ー」(図録『聖武東遊』、2005年12月23日)
- ・「聖武東と『萬葉集』」(図録『聖武東遊』、2005年12月23日)

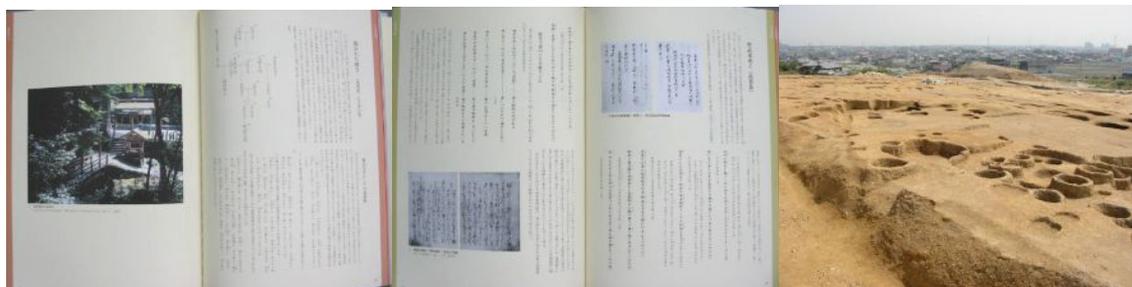


写真1 廣岡「描かれた戦さー『萬葉集』と壬申の乱」(図録『聖武東遊』)

写真2 廣岡「聖武東遊と『萬葉集』」(同左)

写真3 久留倍遺跡から。大伴家持が眺めた伊勢湾を臨む。

(b) 山田雄司の研究成果・刊行物

- ・「室町時代伊勢神宮の怪異」(『神道史研究』54-1、2006年3月)にその成果をまとめた。

要旨 平安時代以降、諸神社において怪異が頻発した。怪異は後に大きな災厄が起きるかもしれない予兆としてとらえられ、怪異が発生した場合にはそれが朝廷に報告され、軒廊御卜が行われることによって、怪異に対してどのような対処をとったらよいか、慎重な判断が下された。そして、数ある神社の中でも、王権と最も密接な関係を持つ伊勢神宮では、怪異の発生にはとりわけ注意が払われた。本稿では、心御柱の違例、千木の頽落、神馬逸走、といった神宮に特徴的な怪異をとりあげ、さらには社殿の鳴動についても考察した。

神宮祢宜たちは怪異発生を主張することによって、王権にとって重要な神社であることを朝廷に再認識させようとしたのである。そしてそのことによって、国家による奉幣が行われ、実利を得ることもできた。室町時代の怪異の特徴として、社殿の損壊が怪異としてとらえられ、朝廷に怪異の発生を奏上するとき、あわせて仮殿遷宮の要請を行うということがあげられる。そして仮殿遷宮がなかなか行われないと、怪異が引き続いて発生した。おおむね十三世紀までは怪異発生を朝廷に報告することにより軒廊御卜が行われ、それに対応する処置がなされていたが、十四世紀になると朝廷の経済的理由等により、怪異発生に応じた速やかな処置がなされにくくなった。そのため、怪異発生の際に仮殿遷宮を行うべき旨をあわせて奏上したものと考えられる。このように、怪異は神霊のあらわれであるが、それを発現させるのは人間の意志であった。

(c) 山中章の研究成果・刊行物

上記シンポジウムの司会、「壬申の乱ウオーク」での資料作成、案内を務めたほか、第四回シンポジウム他で下記の通り報告を行った。

2006年(平成18年)5月1日 月曜日

朝日新聞

・第4回久留倍遺跡シンポジウム報告「朝明頓宮と久留倍遺跡第Ⅱ期遺構群」

・「朝明頓宮としての久留倍遺跡」(2005年12月24日名古屋古代史研究会報告)

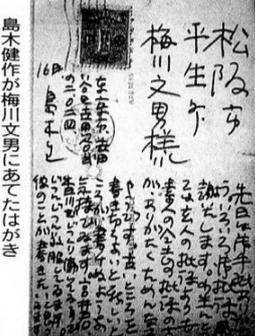
・「朝明頓宮としての久留倍遺跡」(2005年12月24日名古屋古代史研究会報告)

2 伊勢・伊賀地域における文学資料の調査

研究員:濱森太郎(代表)、尾西康充

例年通り代表者濱を中心に伊勢・伊賀地域における文学資料の収集を行った。

プロジェクト関連研究として資料収集の成果を生かして尾西が、三重県松阪市を中心とした労働者・農民・水平社同人の解放運動の研究を『近代解放運動史研究』(和泉書院)として一冊にまとめ高い評価をえた。



島木健作が梅川文男に交えたはがき

作風転換期の 心の中つづる

転向文学の作家・島木健作

戦前・戦中の転向文学の作家島木健作の作風転換期に書かれたはがきが、三重県松阪市で見つかった。1936年6月16日付のはがきには、転向問題を扱った代表作「再建」連載中から、転換後の求道的作風のテーマを温めていたことが読み取れる。この時期のはがきは全集にも収録されておらず、三重大学人文学部の尾西康充助教は「作風転換を示す初めての書簡類で、1級の資料になる」と分析する。(高津祐典)

非転向活動家のはがき見つかる

はがきは三・一五事件で島木と同時期に服役した非転向活動家で、後に松阪市長になった梅川文男氏あて。差出人は「世田谷区世田谷2丁目 島木生」。島木が世田谷に住んでいた時期と酒印から、36年6月16日に出したとわかる。梅川氏のおいにあたる梅川紀彦氏が、松阪市にある自宅の屋根裏部屋を整理中に見つけた。

黒のペン字で「先日は御手紙ありがたう。いろいろ御批評感謝いたします。小生にとつては玄人の批評よりも素人の同志の批評の方が、

島木健作 1903、45年。札幌市生まれ。「癡」「再建」など転向文学の代表的作家で、「生活の探求」(37年)はベストセラー。日本農民組合で運動に加わり、日本共産党に入党。28年の三・一五事件で検挙され、転向した。

犯が帰郷して求道的な生活を送る姿を描く。「ベストセラー」小説「生活の探求」だ。宮井氏の求道的活動への敬意という執筆動機が「再建」連載中からあることが読み取れる。

尾西助教は「表現の評価より、実際の活動家はどう読むか気にしています」と続く。

当時の島木は農民解放運動の実態を描いた代表作「再建」の連載中だった。「宮井君」はその主人公・浅井信吉のモデル。宮井進一氏のごとく、非転向を貫いて香川県に帰郷した。「再建」後の島木は作風を転換し、思想を直に書かれている」と評価する。

3 伊勢から熊野へ ―文化比較のための基礎研究

研究員：塚本明（代表）、山中章、中川正、谷井俊仁、山田雄司、森正人、湯浅陽子、朴恵淑

プロジェクトメンバーは、日常的に学術情報を交換しながら、各々で研究活動を繰り返し広げた。

複数のメンバーによる共同研究としては、まず山田、森、塚本の三人で、三重県から（三重TLOを介して）委託を受け、熊野古道沿いの石造文化財の現地調査を数度にわたり実施し、伊勢国田丸から紀伊国牟婁郡域について、500件を超えるデータを蓄積した。

森の第一の研究目的は、1960年代に顕著になる伊勢湾の汚染とそれに対する人々の認識を明らかにすることであった。このテーマでは、7月8日の16:30~18:00に人文学部棟1階にて、「「百万ドルの夜景」と「不潔」の法則—港都四日市の輝ける未来と、公害の発見—」と題して、報告を行った。会場には教員、学部生を併せて39名の参加を得た。尾鷲と比較しつつ、四日市公害についての認識の実態と転換を論じた。これには塚本も参加し、議論に加わった。また同様のテーマで、11月13日に九州大学で開催された、人文地理学会大会において、「“港都”四日市の輝ける未来と公害の発見」の研究発表を行った。第二に、戦後の伊勢志摩の観光開発について明らかにすることであった。これについては、11月16日に志摩市の阿児アリーナで開催された三重大学文化フォーラムにおいて、「ガイドブックの中の伊勢志摩観光」と題して、講演を行った。

塚本は創造開発研究センターと連携した企画として尾鷲市須賀利町の総合調査を行い、シンポジウム「海村・須賀利に学ぶもの」（2006年1月20日）にパネラーとして出席した。この企画には、森、中川も参加している。

個別の研究活動としては、谷井は、江戸時代の藤堂藩において編纂された『宗国史』に共同研究者の斉藤正和と共に訓注を施し、伊勢湾岸地域における漢文化の受容を跡付けた（「宗国史訓注（一）」として『三重大史学』6号に公表）。

山中は、別途プロジェクト「古代中世伊勢国の総合的研究」での活動を通して、紀伊国（熊野）とは異なり中央政権との関係の密な伊勢国の歴史過程について多大な成果を上げてきているほか、本プロジェクトでの研究成果を活かして、2005年10月8~10日、国立歴史民俗博物館の共同研究「古代社会における生業と権力とイデオロギー」第3回研究会において「古代海浜部小国における海部と群集墳」と題して報告を行った。同研究会では共同研究員を三日間にわたり参河湾から伊勢湾にかけて案内し、伊勢湾における海の生業の歴史的展開過程について解説した。また、第27回城柵官衙遺跡検討会で、壇の越遺跡の評価をめぐってのシンポジウムに参加し、独自の方格地割を持つ伊勢斎宮の遺構との関係などについてコメントした。

塚本は、尾鷲のNPO団体と共同して江戸時代に熊野街道を通った道中記を探索し、全国の図書館、文書館、博物館等で約170点を収集した。分析の結果は、「江戸時代の旅人と伊勢・熊野の食」（2005年5月21日、三重食文化研究会）、「道中日記研究の可能性」

(2005年10月1日、交通史研究会例会)、「江戸時代の道中記から見た熊野」(2006年1月14日、皇學館大学神道研究所公開学術シンポジウム「熊野の自然と文化」)で報告し、その一部は「江戸時代の伊勢路と巡礼たち」(『山岳修験』36号、2005年11月)として公表した。また、尾鷲に残る古文書「尾鷲組大庄屋文書」の整理・調査を2005年9月、2006年3月に地元市民たちと共に実施し、その成果の一部を東紀州の地元紙に「尾鷲組大庄屋文書の世界」として隔週に連載している(現在№53まで)。

II 課題

センターを設立後二年が経過し、いくつかの課題が認められた。次年度以降に向けて課題を整理し、具体的対策を講じていかなければならない。

(1) プロジェクトの課題

1 古代中世伊勢国の総合的研究(代表:山中章)

プロジェクトとして多様な企画を立て、事業を実施した結果多くの市民の参加を得た。地域連携事業として多くの成果を挙げることができたが、プロジェクトの基礎をなす個別研究の成果が構成員に共有されているとは言い難く、定期的なプロジェクト会議、研究会の開催など、共有化の場の設定が急がれる。

2 伊勢・伊賀地域における文学資料の調査(代表:濱森太郎)

年々着実に積み上げられているデータベースを具体的に活用していく方策の決定が求められている。

3 伊勢から熊野へー文化比較のための基礎研究(代表:塚本明)

本プロジェクトが上記のように、多くの成果を上げてきたと自負しているが、個々の研究成果を相互につなぎ、また伊勢と熊野とを総合的に「文化比較」するまでには至っていない。

(2) センターの課題

来年度は設立三年目を迎える。伊勢湾文化資料研究センターが収集した資料は膨大な量に上る。こうしたセンターにおいて培ってきた多くの資料や研究成果を死蔵するのではなく、広く研究者・自治体・市民に公開する必要がある。その具体的方策として、センター主催の「公開シンポジウム」の開催を検討すべきであろう。

一方各プロジェクトの活動は必ずしも共有化されているとは言い難い。これらを横断的に結合し、研究の相互進化をはかる場として「伊勢湾研究会」の定期開催など、共同研究の場をセンター全体で取り組むことが求められている。

さらにより大きな課題として、他の研究センターとの研究成果の互換も大きな課題であろう。人文学部の研究が孤立化することなく相互に認識しあい、理解を深めることが新たな学部像を構築する基礎になるのではなかろうか。

写真で見る活動状況

(1) 「古代中世伊勢国の総合的研究」プロジェクト



写真 4 第 2 回壬申の乱ウォーク(2006 年 2 月 12 日実施)にて久留倍遺跡の歴史的な位置づけ、三重大学人文学部による発掘調査の成果について耳を傾ける市民。200 人参加。

(2) 「伊勢から熊野へー文化比較のための基礎研究」プロジェクト



写真 5 熊野市・観音道入口の観音石像群。熊野古道沿いの石像文化財 500 点強について、所在地、寸法、刻字、状態等を記録し、写真に収めた。